

戦後のIFEL（教育指導者講習会）幼稚園教育班の実際

－大橋和子の受講ノートを中心に－

高月 教恵¹⁾＊

1) 新見公立大学健康科学部健康保育学科

(2020年11月18日受理)

幼稚園教育グループ（第6回から幼児教育と改められた）の教育指導者講習会が、昭和25年9月から12月（第5回）と昭和26年1月から3月（第6回）に、全国から幼児教育指導者を集めて開催された。講師は、アメリカ合衆国文部省初等教育顧問のガートルード・エム・ルイス、周郷博らである。第5回の参加者である大橋和子の受講ノートを中心に、IFELの実際について考察した。その結果、5回生は、お茶の水女子大学附属幼稚園で実際に観察記録をとり、その観察記録をとることを通して、幼児の研究の方法とまとめ方について学んだと考えられる。そして、その方法は、今も保育実践に受け継がれ生かされていると思われる。

（キーワード）IFEL、幼児教育、大橋和子の受講ノート、観察記録

I. はじめに

筆者は、奈良女子大学附属幼稚園（以下、奈良女大附幼）の戦後の幼児教育の実際（内容・方法）を調べるために、戦後の奈良女大附幼の中心人物である元副園長大橋和子（以下、大橋）を訪問した。その際、「今も心に残っているルイス先生のIFELの講義」と言って見せられたのが、大橋がIFELに参加してルイスの指導を受けてとられた一冊の受講ノートであった。IFEL幼児教育班参加者の受講録は、今までに目にしたことのない貴重な資料である。

IFELの先行研究については、『日本近代教育百年史第6巻』¹⁾においてIFELについて取り上げられているが、全体の講習会の紹介に終わっている。高橋寛人は、IFELの実際（内容・方法）について、分科会ごとに資料を集録し、編集して『占領期教育指導者講習（IFEL）研究資料』²⁾を出版している。貴重な研究資料集ではあるが、考察には至っていない。大岡紀理子は、『第六回教育指導者講習研究集録Ⅸ幼児教育』³⁾と『幼年教育』⁴⁾を中心に分析し、考察しているが、受講者側の考察については、今後の課題としている⁵⁾。そこで、IFEL第5回生の大橋の受講ノートを中心に、IFEL幼児教育班の実際がどのようなものであったかを明らかにするとともに、大橋はIFELで何を学び、その後の幼稚園現場でどのように生かしたかについて考察するのが、本研究の目的である。

II. IFEL幼稚園教育班（幼児教育班）

IEFLとは、Institute For Education Leadershipのこと

であり、1948（昭和23）年9月から1952（昭和27）年3月まで、8期にわたって、文部省とCIE（GHQ民間情報教育部、Civil Information and Education Section）の共催で、全国から教育関係の専門家を集めて開催された教育指導者講習会のことである。『第六回教育指導者講習研究集録Ⅸ幼児教育』の序文に「第一回目から第四回迄が主として教育新制度に対する行政組織の整備を目的としたのに対し第五回及第六回は教育の内容の充実と目標として主として教職員の養成と再教育に対する措置が講ぜられたのである」⁶⁾と記されている。第5回・第6回では、幼稚園教育グループ（第6回から幼児教育グループと改められた）⁷⁾が設けられ、第5回は1950年9月18日から12月8日まで、第6回は1951年1月8日から3月31日までの2回にわたってお茶の水女子大学で開催されている。講師は、アメリカ合衆国文部省初等教育顧問のガートルード・エム・ルイス（Gertrude M. Lewis 以下、ルイス）、周郷博（お茶の水女子大学 以下周郷）、功刀嘉子（お茶の水女子大学）であり、通訳として下牧英子（文部省大学学術局）が任にあっている。中島端子文部事務官は、「日本側専任講師は、お茶の水大学教授周郷博氏で終始中心となって講義、研究、グループ指導に力を注がれた。米人講師としてはアメリカ合衆国初等教育課顧問ーガートルード・ルイス博士が来朝され…」⁸⁾と述べていることから、ルイスと周郷が中心となって講義、研究、グループ指導にあたったことがうかがわれる。

ルイスについて、中島端子は、「…その高き人格、幼児教育に關する識見、該博なる知識、それは観念的な幼児教育學ではない。全く幼児の側にたち幼児一人一人に即して

＊連絡先：高月教恵 新見公立大学健康科学部健康保育学科 718-8585 新見市西方1263-2

つまれた御研鑽、御経験による殊玉のようなもの。講習に對する責任と努力、つねに日本側講師をたてられた謙虚な態度を示される、自然なその姿に、幼稚園教育班は全く幸いなるかな、よき講師を得、よき感化を得ることが出来た」⁹⁾と述べている。また、通訳の下牧英子も、「…実際に先生は美しい方でしたね、姿も心もそうして声までも。美をつくりだす調和があると思います。…先生の中にはすべてがニュアンスを以て調和されてありました。現実的の把握とそれを超越した理想、あくまでも人間的でありながら崇高な人類愛への超人的情熱。…あまりに東洋婦人的だとさえ思えた謙虚さ。実際先生はまた鋭い方でした。言語の障壁など先生の洞察力をもってしては薄紙のようなものでした。…興味と熱を起こさせる力、そして汲めどもつきぬ深さをもっていられたことは事実です。…」¹⁰⁾と述べていることから、ルイスは人格的にも幼児教育についての学識の高い非常にすばらしい人物であったことがうかがわれる。また、ルイスが、「…もし子供たちが、現代の世界において生活の問題にとり組んでいくように準備されなければならないとしたら、日本の子供たちは、このような保護以上のものを必要としているわけです。彼らは、彼らをして独立した、人々とともに協力する人間にまで成長することを助けるような教育を必要としています。…このような教育は、彼らのよき成長を助け、彼らによい選ばれた経験をえさせるようにさせ、そうして、やがて自主的な生活態度をもち、責任と理解とをもつ人々にまで成長させていくことだと思われます。このような教育を与えるためには、教師や父母は、子供たちがどのように成長するか、子供たちの成長を助けるために学校や家庭はどんなことをなしうか、よく理解する必要があります」¹¹⁾と述べていることから、ルイスの子どもの主体性を尊重した教育論を垣間見ることができる。

参加者について、中島端子は、「…全國公私大學長及び短期大學（部）長・都道府縣教育委員會、都道府縣知事等から推薦された人々を、詮衡委員關係係官で詮衡を行い、選ばれた二十五名のうち、出願ののちにいろいろの支障が出来た人もあって、結局講習を受けられた方々は十九名であった」¹²⁾と述べているように、参加者は全国各県代表の幼児教育の専門家であり、第5回参加者数は19名であり、第6回の参加者数は17名であった。第5回・第6回参加者は次のとおりである¹³⁾。第5回参加者は、田村 澄（藤幼稚園）、富所忠雄（青森県教育委員会）、今泉静江（栃木県教育委員会）、友松秀子（埼玉大学附属幼稚園）、山村きよ（東京都教育委員会）、古屋 彰（富士川幼稚園）、小河 洋（静岡県教育委員会、山口たつ（愛知学芸大学附属幼稚園）、松村伊佐武（福井大学附属幼稚園明神幼稚園）、稲住清左衛門（三重県教育委員会鈴鹿出張所）、大橋和子（奈良女子大学附属幼稚園）、中西ヒサノ（京都市立乾隆幼稚園）、清水桔梗（大阪市教育委員会）、上野塩子（聖和女子

短期大学）、梶谷岩雄（島根・平田小学校同幼稚園）、内藤時光（広島県教育委員会）、岩佐崇子（徳島大学附属幼稚園）、高森 豊（熊本市立五福幼稚園）、飯田英雄（宮崎大学附属小学校）であり、第6回は、渡辺葉子（秋田大学教育学部附属幼稚園）、角尾 稔（東京学芸大学）、菊池ふじの（お茶の水女子大学附属幼稚園）、渡辺俊枝（千葉大学教育学部附属幼稚園）、本多玄洲（小田原市・こゆるぎ幼稚園）、水野清孝（新潟県立新潟中央高等学校）、水野 節（富山県教育委員会）、遠藤 君（頌栄短期大学）、遠藤孝子（堺市立第三幼稚園）、増田妙子（岡山県教育庁）、北條はる（鳥取西高等学校附属幼稚園）、石元安幸（高知県教育委員会）、小田眞子（大分県教育庁）、八木シヅ（熊本大学教育学部附属幼稚園）、野村ウメ（山口県徳山市夜市小学校）、深堀久子（長崎純心幼稚園）、井上ハル子（福岡教育庁）である。

III. FEL幼稚園教育班の講習会の内容と方法

『第六回教育指導者講習研究集録Ⅸ幼児教育』の序文において、教育指導者講習本部のIFEL DIRECTORの二方義とヴァーナー・エー・カーレー(Verna A. Carley)は、「IFELの内容は、資料の整備並びに技術の修練が中心となり それぞれがその分野における専門家の研究集会の形をとったのである。…各分野の研究は六週間及至十二週間に及ぶ各科のgroup workである」¹⁴⁾と述べていることから、民主的活動の方法としてグループ・ワークで研修が行われたことがうかがわれる。IFEL DIRECTORのカーレーについて、山崎奈々絵は次のように紹介している。「カーレーは1946年11月にCIEに赴任してから占領末期まで、教員養成制度の改革、教育職員免許法をはじめ日本の教師教育改革のほとんどに大きな影響を与えた。進歩主義思想の持ち主で、1927年にウイコンシン大学を卒業後、コロンビア大学大学院に進学し、1929年に修士号を、1933年に博士号を取得し、1934年から41年までスタンフォード大学で助教授として教師教育の責任者の地位にあった。第1～4期IFELでは教育学部教授関係担当者であり、第5期以降IFELの総括事務担当者であった」¹⁵⁾。

講師のルイスは、『第六回教育指導者講習研究集録Ⅸ幼児教育』において、「日本の学校の子供達のカリキュラムは日本の社会に於ける子供の要求に即応したものでなければならないと考えたのである。けれど集積された日本の教育書には日本の子供の要求並に特徴に関する知識が僅かしかみつからなかった。そこで観察という方法によって子供の直接の研究を行う事にし、お茶ノ水大学¹⁶⁾附属幼稚園に於て約六ヶ月にわたり実際の研究がなされたのである。…これらの研究に並行して、受講生は、1. ヨーロッパ及びアメリカに於ける近代の科学的研究によって明らかにされた如く、身体的、社会的、情緒的並に知的発達

つの基本的分野における人間の成長と発達について、2. 家庭と学校環境が発達に及ぼす影響について研究した」¹⁶⁾と述べている。そして「彼等は愛育研究所における児童研究の仕事を幸にも見学する事が出来たし、また代々木のアメリカン・スクールをはじめ東京都下の多くの幼稚園を見学した」¹⁷⁾と述べていることから、お茶の水女子大学附属幼稚園で実際に子どもの観察記録を取り、一方では四つの基本分野から成長発達についてまとめ、さらにアメリカン・スクールなどの幼稚園見学をして、その事実に基づいて研究した様子がうかがわれる。また、「心理学の方面では山下教授や牛島教授が、健康及び生長の方面では平井医師が特に援助された」述べている。このことについて、中嶋端子は、「以上の研究の為にはお茶の水大學生牛島義友教授・戸倉ハル教授・平井信義助教授・家政大學の山下俊郎教授をはじめ多数の講師の絶大な御援助をいただき、また会場校の御茶の水大學生関係官、殊に附属幼稚園主事及川ふみ教授の陰に陽につくされた御配慮には感謝の外はない」¹⁸⁾と述べていることから、山下俊夫や牛島義友や平井信義や戸倉ハルや及川ふみ他多数の大学関係者が指導助言した様子がうかがわれる。そして、「この観察並に研究の成果は（第六回教育指導者講習研究集録Ⅸ幼児教育）第五章に報告されている」¹⁹⁾とのことである。また、ルイスは、「勿論第五回IFELグループは、幼年教育学校の機構並に行政管理に関する具体的諸問題や、これ等の子供達のための教員養成について考えたのであるが、それ等の問題が第六回IFELグループによる興味の中心となったのである。受講生達は、目標、カリキュラム、行政管理からなる四つの分野を研究した」²⁰⁾と述べている。このことから、第5回IFELグループの研究を引き継いで、第6回IFELグループは、教員養成、目標、カリキュラム、行政管理の4分野について研究したと考えられる。さらに、第6回IFELグループの研究の仕方について、「彼等は日本の実状を現実に即して考慮すると共に将来の目標をもうちたて様とした。その間文部省、厚生省関係の人々、総司令部民間情報部の人々、幼年教育に関心を持っている団体の人々、教員養成の学長・部長及び教授達、また学校建築の専門家や前回IFELの受講生の意見をたゞして来た」²¹⁾と述べている。

第6回IFELグループの一人である菊池ふじの（お茶の水女子大学附属幼稚園 以下、菊池）は、「私たちアイフェル幼稚園教育班の勉強の仕方は新しい研究の仕方とされているグループ・スタデママー（研究集会）、またはワークショップの標本といってもよいと思う。…はじめに各人の研究したいと思う課題を提出して、これを幼稚園教育の全体的な見地から四つに分類した。同時に十七名もそれぞれ四つのグループに分れ、グループごとに協同研究をすすめていった」²²⁾と述べている。ここでいう四つのグループとは、「一、幼年教育の必要および目標に属するもの 二、

幼年教育のカリキュラムに属するもの 三、幼年教育のための教師の養成に属するもの 四、幼年教育のための行政管理組織に関するもの」²³⁾である。さらに、菊池は、「…結論を生むまでには、私たちは手分けして、それぞれ受けもつた問題についての研究プログラムをたてて、先生方の指導と助言をえ、それから研究にとりかかったのである。そしてその問題が由つて来るところすなわち沿革と現状とを、文献や講義にもとめ、役所におもむいて統計や調査等の資料にただし、そのうえで先生の指導のもとに研究討議して結論を導きだしたのである」²⁴⁾と述べている。さらに、ここで幼年教育としたことについて、菊池は「ルイス先生から[私が日本にきて調べてみてわかったのであるが、日本では幼稚園と小学校とははつきり分れていて、その教育の内容などについてもあまり連絡がとられていないようであるが、これをどう思うか？ また幼稚園に入るまえの年齢の子どもについての研究というものを、幼稚園でも保母の養成学校でもほとんどしていないようであるが、これをどう思うか？]との発言があり、…かねてから私たち幼稚園の教師は、小学校の2・3年まではこの幼稚園の生活をつづけさせたいものだ、そうしたら子どもたちは幼稚園のときよりも、もつと複雑にねばり強く、しだいに協調性も強くなってきて、一貫したよい教育が展開されることであろう…小学校低学年（3才から8歳まで）を含めたこの名称をいかにすべきか…いろいろ討論したすえに、…[幼年教育]と呼ぼうということになった」²⁵⁾と述べている。

これらのことから、講習会はグループに分れての研修体制で行われ、研修内容としては、第5回生が実際の子どもの観察に基づいて子どもの成長・発達について研究し、さらに幼稚園見学に基づいて幼年教育学校の機構や行政管理に関する具体的諸問題や教員養成について研究した様子がうかがわれる。第5回生のこの研究を引き継いで、第6回生は幼年教育の目標・カリキュラム・教員養成・行政管理組織について研究を進めた様子がうかがわれる。そして、その研究の成果が、『第六回教育指導者講習研究週録Ⅸ幼児教育』にまとめられているということになる。

IV. 大橋和子の受講ノート²⁶⁾

1. 大橋和子その人（2006.3.27の聞き取り調査より）

大橋和子は、1920（大正9年）5月6日に名古屋市に生まれ、父親の転勤で東京、仙台、金沢に移り住み、仙台県立第一高等女学校（1年2学期から4年1学期）、金沢県立第二高等女学校（4年2学期から5年）を卒業後、金沢県立第二高等女学校家政科を卒業している。1941（昭和16）年10月に結婚し、翌年の1942（昭和17）年10月に夫と死別している。1943（昭和18）年4月に奈良女子高等師範学校保母養成科に入学し、卒業後（1944（昭和19）年4月滋賀県大津市立膳所幼稚園に勤務するが、戦争の激化とともに休園と

なり、滋賀県学校教育課の課長秘書として勤務している。終戦後1945（昭和20）年、再び膳所幼稚園に戻り主任保姆として勤務後、1946（昭和21）年4月に滋賀県の指導主事になっている。1949（昭和24）年、滋賀県からは園長にと言われたが、小川正通（奈良女子高等師範学校・奈良女子大学教授・附属幼稚園主事）に誘われて、同年4月に附属幼稚園保姆に就任し、園内業務では研究部門を担当している。そして、1950（昭和25）年9月にIFELに参加し、研修後は再び奈良女子大学・奈良女子高等師範学校附属幼稚園にもどり、担任教諭として子どもにかかわりながら、研究部門を担当し、1972（昭和47）年4月に教頭（昭和51年から副園長に名称変更）に就任している。その年に『幼児のことはあそび』、続いて副園長に就任した1976（昭和51）年『絵本との出会いー3, 4, 5歳児の指導』、1979（昭和54）年『調整力を高める運動遊び』、そして退職する年度の1983（昭和58）年『教育課程3・4・5歳児の年間指導計画』を、奈良女子大学附属幼稚園幼年教育研究会編として、ひかりのくに（株）より出版し、1984（昭和59）年3月に退職している。あえて幼年教育研究会としている点に、前述したIFELでのルイスの「学校教育の実際について」の講義が思い出される。大橋の教頭・副園長時代は、まさに大橋の幼児教育の集大成の時期であったと言っても過言ではない。退職後は、大阪松蔭女子大学（非常勤）で教鞭をとり、晩年は自宅で岡本夏木らと研究会を開き、後輩の相談には時間を惜しまず対応し、平成29年（2017）12月にこの世を去るまで、まさに幼児教育一筋に生きた人であった。

2. 大橋和子の講義ノート

講義ノートは、縦20.5cm、横14.5cmの大きさのルーズリーフに、全106頁（白紙・余白の部分含む）に亘って記されている。長い月日の間に頁が入れ替わっている様子がうかがえるが、74頁から90頁までは講義の中で印象に残ったことや重要に思ったことが箇条書きに書かれており、92頁から102頁までは幼稚園見学記や参観後の話し合いについて記されている。104頁から106頁には大橋自身の幼児教育への思いが日記のように書かれている。

（1）観察記録の実際

ノートには、3才8ヶ月A男と4才児B子と4才4ヶ月C子の観察記録が記されている。観察記録の日付は、10月17日、10月24日、10月25日、10月26日、10月28日 となっている。A男は10月17日・24日・25日・26日・28日の記録があり、B子は17日のみであり、C子は24日、25日、26日、28日の記録がある。

① A男の観察記録

A男の観察記録を見ると（表1参照）、大橋は見たままのA男の行動を詳細に観察して、記録している様子がうかがわれる。

表1 A男の10月17日の観察記録

（アンダーラインはノートに記されたものである）

（森組）A男 3才8ヶ月（昭22.3.4） 父32 官吏，母38 医師，従兄21才 弟1才
 （10月17日）9.41 I男に後からくびにだきつかれて手でIをおしのけて逃げようとする。左手をひっぱられ乍らにげて部屋に入る。手をはなしてよろける。しゃがんで靴を右手でなおし、走ってオルガンのかげに逃げる。オルガンの横にのっている松ぼっくりをみる。I君の真似をして、松ぼっくりを食べる真似をする。I男が廊下へ出たのを真似して、廊下へ出て走り、山組から出て来て先生にすがりつく。先生の左足にすがりついたまゝ、歩く 9.42 先生にかちりついたまゝ、部屋に入り、先生の机の所で一寸○をとられて離れるが、又先生の後を追っていく。先生が椅子に座ったら、先生の椅子にすわりこんで先生を落してすわる。さるを描いてある紙をみる。喜んで先生が猿の紙を取るのを眺める。先生が自分の前のを取ったら、いやいやと先生に手をのばす。“さるの紙をひらいてみ乍ら、”あのおうーん、仔っちへつけるの？”と頭の所を持って見せる。先生“そうね”。A男“あのおね、ほんとはね、こっちへぬるんだよ。ほんとはね、こっちとこっちへ描くんだよ”と裏と表をひっくりかえしてみせる。女の子がひもをもったのを見て、その方へ走っていき、他のひもを持とうとして、I男に取られ、女の子のひもをひっぱり、無理にその中へ入る。女の子がおこってひっぱると、A男“ちょっと待って ちゃんと待って”と言って足をぬいてひもから出て、I男のひもの方へ行き、I男の後のひもに入る。I男が“駅がないね”と言えば、T男も“駅がないね”と真似る。黒板にはあってある絵を見て“虎強いぞ”と又真似をする。ひもに入って歩く。“駅がないぞ”といい乍ら歩く（集団的独語）。ちょっとまってくつの後ろのぬげたのをなおして、ひもから出る。又入る。I男“こっち行くよ” T男ついていく。I男歩く。T男とまって下りるから、下りるから、と言ってひもから出る。女の子の電車を見て、大またに二足歩く。
 9.47 自分の椅子の上に立って、両手を机につく。隣の椅子に座り、又立って人さし指に糊をつけ、右手でさるの紙をおさえ（紙はひらいて裏が出ている）頭の部分に糊をつける。つけ乍ら 左の方の電車ごっこを見る。友達がおいと言ったのを聞いて“おいっていうんぢゃないぞ”といい又皆の方をみながら糊をつける。左の頭の部分に糊をつける。先生にむかった、“一寸エンピツ、先生、お目をつけるの、エンピツ”といい 紙を二つに折って立たしてみる。“たたないや” エンピツを女の子が取ろうとするのを取り返す。エンピツで女の子に“描いて上げる”と言い乍ら描こうとしとめられ、自分のに描こうとしてやめて、“もう一つ”といい 9.48 又もう一枚紙をとる。 休けい 10時エンピツで今とった豚の紙に字の様なものをかき、茶色のクレオンをとって、豚をぬる。…10.03… 10.10…10.11…

休けい 10.14 砂場に行く。男の子の所に行き、スコップを持って、土をすくって手でおさえ、その上へ枯葉をさしこもうとしてやめ、そのまゝ持って立ち上り、先生の方を注意してみて…他の男子のおしている箱につまづきよろける。しゃがんで I が木の車を持っているのを見て、“二人でしようね”とい、他の木の車を持ってそのそばへ置く。… 10.20

さらに、大橋は同日（10月17日）にB子の観察記録をとっている。B子の観察記録は、「丸い食卓の上にコップ3ヶとお皿4ヶをきれいに並べる。…今度は丸いおぼんの上にコップを並べている（2分）」というように時刻の表示がなく時間で示されている。10月24日のA男とC子の観察記録を見ると、C子の観察記録は9時25分から9時40分までとなっており、（後飯田先生）と書き加えられている。A男の観察記録は9時45分から記載されている。このことから、観察記録は一人一人を追って観察されている様子が見えがわかる。そして、C子の観察を他のIFEL参加者に引き継いでいることから、参加者で協力しながら観察している様子もうかがわれる。そして、観察は時間を区切って行われたようである。10月17日では、9時41分から10時20分を7分間、12分間、6分間として、各々の間にわずかではあるが休けいを入れている。この休けいは、「ルイス先生は、観察は幼児研究の第一歩であり、しかも[正確で科学的な観察が必要]なことを説かれ、またその方法についても一々私たちの手を取って懇切に導いてくださいました」²⁷⁾とあるように、ルイスの助言に基づくものではなかったと思われる。

② 第1回目の研究

第1回目の研究は、先の観察記録に基づいて、考察がなされている。10月17日のA男の観察記録に基づいての考察は、表2のとおりである（表2参照）。

表2 第1回目の研究

考察1	T男（3才8ヶ月）	10月17日	9時41分から9時48分まで7分間
	・I男のまねをして、まつぼつくりを食べるまねをする。模倣		
	・I男のまねをして廊下へ走って出る。		
	・I男が“駅がないね”と言え、まねをして“駅がないね”という。		
	・I男が“虎強いぞ”と言え、 “虎強いぞ”とまねをする。 ↓ テーブルで手技をする。		
	5分間	○女の子が電車ごっこの紐を持ったのを見て その方へ走っていき そのまゝ I男と電車ごっこをする。	
	↑		注意
	テーブルにかえて手技をする。		

・先生にすがりつく ・先生にすがりついたら、部屋に入る。
・机の所で一寸○をとられ先生から離れるが又先生を追う。
・先生の座った椅子にわりこんで先生を落として座る。
・I男後から抱きつかれ 手でI君を押しつけて逃げようとする。
・左手をひっぱられ乍ら部屋の中へにげる。
・走ってオルガンのかげに逃げる。
・先生が手技の材料の猿をとりよせるのを見て嬉しそうにする。
・先生が自分の前の猿の紙をとったら、いやいやという。
・電車ごっこの紐をとろうとしてI男にとられ、女の子の持つ紐に無理に入る。
・足にひもがからまったのを、“ちょっと待つて”といって手で手伝ってはづす。
・I君と電車ごっこをしながら “駅がないぞ 駅がないぞ”とひとりごとを言う。
・右手で紙をおさえ 左ひとさし指で糊をつける。…
考察2 10時～10時12分まで 12分間
・エンピツで豚の紙に字のようなものをかき 茶色のクレオンをとってぬる。…
考察3 10時14分～20分まで 6分間
・土をすくって手でおさえ その上へ枯葉をさそうとしてやめ、 ・先生の声のする方を注意してみて ・I男が木の車を持っているのを見て“二人でしようね”とい、他の車を持って来てそばへ置く。…

10月17日の観察記録が講義ノートの2頁から頁6までに記されていて、考察2については講義ノートの20頁から21頁に、考察1については22頁から23頁に、考察3については24頁に書かれているが、考察された日付は記載されていない。そして、考察が考察2、考察1、考察3と順になっていることから、ノートがルーズリーフであることを考えると、ノートのページが移動したのではないと思われる。

ここで行われた研究は、9時41分から10時20分を7分間、12分間、6分間の観察のまとまりにしたがって（観察者の休けいまで）、考察1、考察2、考察3として行われている。

考察1については、真似る、すがりつく、逃げるといったようなそれぞれの共通した事柄をまとめるようにして、活動のポイントのみを箇条書きにして記している。共通した事柄以外の他の行動についての考察は、観察時刻の流れに従って、活動のポイントのみを箇条書きに記している。

③ 第2回目の研究

第1回目の考察の研究が終わると、それに基づいて身体的・情緒的・社会的・知的に焦点をあわせて、事柄（子どもの箇条書きにした行動）を分類している（表3参照）。

表3 第2回目の研究

身体的	(観察者 大橋)
(3才8ヶ月 男子)	
・おみこしを引張り合って両足とびをする(みこしは三人で持つ)。	
・一足とびが多いが、スキップも出来る。…	
情緒的	(3才8ヶ月 男子)
・I男に後からくびに抱きつかれて、手でI男を押しのかけて逃げる。	
・先生にすがりついて歩く。…	
社会的	(3才8ヶ月 男子) (10.17)
・他の子どもが木の車を持っているのをみて“二人でしようよ”といって たの車を持ってそばへ行く。	
・他の子が、スコップで砂を入れるのをはらいのけて、自分のヘラでわんの砂をたたいてかためる。…	
知的(1)	(3才8ヶ月 男子) (10.17)
●・ぬげた靴を右手でなおす。	
・追いかけて、オルガンのかげに逃げる。…	
知的(2)	(3才8ヶ月 男子)
●・友達の言葉の後をついて その通り言う。取ってしまえ、取ってしまえ…	
●・先生に鼻をかめと言われて、一人で鼻をかみ、よごれた紙を捨て、残りの紙をた、んでポケットに入れる。…	
○・紙を折りた、み乍ら 出来た形をみて命令する…	
知的(3)	(3才8ヶ月 男子)
…	
●・“もう向こうへいくの。どっちからいくのでしょうね。” “煙がいくから行くんでしょね”。…	
○・遊び道具を自分でえらんで持ってくる。(木わんとスコップ) …	
・27分間に、17回、木わんに砂を盛ってへらでた、く…	

第2回目の研究がいつ行われたのかは不明であるが、第1回目の考察に基づいて、身体的・情緒的・社会的・知的の4つの分野からさらに研究が進められた様子がうかがわれる。知的な事柄(子どもの行動)については、(1)(2)(3)に分けられ、さらに各行動の文頭に、●と○と・に区別して印がつけられている。

④ 第3回目の研究

第2回目の研究に基づいて、さらに第3回目の研究へと進められている(表4参照)。第2回目までの研究はIFEL参加者個人が中心となって研究が進められた様子がうかがわれるのに対して、第3回目の研究はIFEL参加者全員の観察記録に基づいて各々が研究した第2回目の研究結果を持ち寄って、全員で研究が進められたようである。その結果が表4である。表4(第3回目の研究)では、身体的・情緒的・社会的・知的の4分野から研究された。3才

から6才までの各年齢別のIFEL参加者全員の観察記録に基づいた事柄(子どもの行動)がまとめられて記されている。

表4 第3回目の研究

身体的	
3才	1. ♀ボールを投げる(サイドスロー)。 2. ♀一足跳び。… 19. オルガンの踏板をふむことが出来る。
4才	1. ♀ですりを這い上る。 2. 太鼓橋で轉廻する2回 ぶらさがって体をふる10回。… 6. スベリ台を一足で五段上る ○オルガンを手先を器用に動かしてひく。♂靴を正しくはくことが出来る。
6才	♂後とび(後とび、一足とび、走りとび)を長くする。23回 25回 50回。
Emotional 情緒	
3才	♂1. よく先生にすがりついて歩く 2. 首に抱きつかれて押しのかけて逃げ。3. … 15.足を踏まれて、泣く。
4才	1. 「危ないからそんな所へ行っちゃだめよ」 2. … 14. 絵を描いていて女の子がみると手○○○○かくす。
5才	1. スキップし乍ら歌をうたう。2. … 25. 隣の女の子へ体をすりよせる。… 27. ○○○○…
6才	1. 本を静かに見る。 2. 「ありがとう」「御免なさい」… 2 6. けんかの手出しをする。
social	
3才男	v ママ1. 「○○ちゃんおやすみだね」とうしろをむいて女の子に話しかける… 23. くつをしまわないで部屋に入る。
4才	1. とられないように番をする。 v 2. ブランコを数えて順番を待つ… 21. 5・6人のグループで木の○をする。…
5才	v 1. 女の子と二人で仲よく絵本をみる。… v 20. 女の子が小さい男の子にクツペラを使ってはかせてやる。
6才	v 1. 左側の男の子を眺めて「自分の席で書くんだよ」ときめつける。 2. うしろを向いて先生と友達の話し合いに耳を傾ける。… v 19. 「○○ちゃん 先から使っているから、貸して上げるよ」といって自分の玩具を貸して上げる。
知的	
3才	1. b紙をぐるぐるまわしてぬる。2~12は事柄につ

	いては記載されておらず、くくって大橋と書かれている。… 25. ソラシドという。
4才	1. 藍のクレオンをさがして出す。… 21. お姉ちゃんに大きいのを買ってあげる よ。妹にはこんな小さいのを買って上げるよ。
5才	1. 箱のふたのうらにすじママをかいてその筋をながめた。そして欲しい色をたしかめた。… 22. 黒と白で灰色の色彩を出す。
6才	1. 考え乍ら 積木を積む。… 31. 花瓶のかげを黒でまるまると書く。

大橋の講義ノートの観察記録については、ここで終わっている。

⑤ まとめ（第六回教育指導者講習研究集録第五章）

大橋ら5回生の研究が第六回教育指導者講習研究集録第五章にまとめられている。その第一節をみると、「表1・2・3・4に基づいて、1.日本の子供たちはどんな運動を好むか、2.幸福感を求めているか、3.子供たちはどのように集団生活に参加していくか、4.（4の番号が抜けていると思うので、4を書き加えた）子供たちはどんなことに興味をもつか」²⁸⁾、の4つの分野から、さらに整理して、まとめられた様子がうかがわれる。例えば、大橋の記録が、第六回教育指導者講習研究集録第五章に、次のように生かされ、まとめられている（表5参照）。

表5 まとめ（第六回教育指導者講習研究集録・第5章一部抜粋）

…2幸福感を求めているか … (1) 認められたい心【廊下へ出て走り、部屋から出て来た先生にすがりつく 先生の左足へすがりついたまま、歩く先生にかちり着いたまま、部屋に入り 又先生の後を追って行く 先生の間に割込んで坐る】三才児（男）であるが、言葉で表現していないがその動作ではっきり自分の信頼する先生から認められて欲しい愛して欲しいという心の欲求が十分に意思表示されている事がわかります。それによって子供は無上の満足を感じ幸福に満たされます。そして此の愛情こそ情緒の基礎を形成していると思います。… (3) いやな気持ち不安な気持ちから逃れようとする心【或る子に後から首に抱きつかれてその手を押し退けて逃げようとする。左手をひっぱられ乍ら逃げて部屋に入る。手を離してよろける。しゃがんで靴を右手でなおし、走ってオルガンのかげに逃げる。それから廊下へ出て走り、部屋から出て来た先生にすがりつく】三才児（男）此の子は他の子供が後から首に抱きつかれ身体的不均衡に伴う心の不安からのがれようとして、もがいている様子がわかります。そして先生をみつめてその傍へ行って始めてサッパリしたという気持ちになり得たのです。こういった身体的不均衡から来る不安によつて物に臆する傾向が生じてくる場合もある事が考えられます。
--

注) 昭和二十五年度教育指導者講習会：第六回教育指導者

講習研究集録・第5章、209、212、1950。

(1)子供たちはどんなことに興味をもつか、については、観察で得られた実際に基づいて、まず、年齢ごとに、興味と特徴に分けて、表にまとめられている²⁹⁾。次いで、(2)ままごと遊びから何を知ったでしょう、(3)子どもたちはどうして砂場で遊んだでしょう、(4)描いたり、作ったりしているなかから私たちは何を見たでしょう、(5)どんなにして子どもたちは伸びているのでしょうか、の各々の項目について、年齢ごとに事例と考察が記されている³⁰⁾。

最後に、おわりにとして、「この章で私たちは観察によって得た幼児の研究を一通りまとめましたが、観察の場所は一つの幼稚園《お茶の水女子大学附属幼稚園》に限定されており、機関も短く、対象とした子どもも全部にわたっていないために、たゞ一つの資料とした生まれたものに過ぎません。長い間にわたってもっと多く、広く観察の事例を集めて研究するならば、一そうよい幼児教育の資料が生まれるでしょう。」³¹⁾と書かれている。

このことから、IFEL第5回生は、幼児の研究の第一歩を観察として研究の方法とまとめ方について、観察記録をとるという実践を通して、学んだことがうかがわれる。

大橋は、ノートに講義の中で印象に残ったことや重要に思ったことが箇条書きに書いている³²⁾。その中に、ルイスの言葉として、「アメリカの講師の言の簡けつさ³³⁾をよく感じ、ショックをうけたとおもう。日本の学者は実に抽象的に物を言う。日本の学者を社会から遊離させたのは、学者だけじゃなく下り、社会の責任である」³³⁾と記している。そして、周郷の言葉として、「日本の学者は、実際から来たことではなく、理論だけをおつかぶせるように言う。これは長い歴史から来たことである。日本は、学者が考えたことを実行することが出来なかった。だから、実行しないことばかり考えている。[実物をとらえて考える。将来に希望を持つ]ということをルイス女史から学んだ」³⁴⁾記している。このことから、周郷もまたルイスから、子どもの事実（姿）に基づいて研究しなければならないことを学んだことがうかがわれる。そして、なによりも、IFEL 5回生は、観察によって得た子どもの事実（子どもの姿）に基づいて、子どもの成長発達を考えて理解し、カリキュラムを作成し、実践しなければならないことを学んだのではないかと考えられる。

(2) 幼稚園参観の実際

幼稚園参観については、大橋の講義ノートの92頁から102頁に記載されている。内容を読んでみると、実際に行われた幼稚園参観とその研修の様子は、102頁からページを順に戻ってくると時を追って読み進められるので、102頁からページを逆に読み取って、整理していくこととする。

① 参観について話し合い³⁵⁾

表6. 今までに見た幼稚園の話し合い

10月23日（月）九時三十分

清水、A幼稚園は、訓練が主で真の保育ではないと思うLewis、どこの幼稚園はよい、悪いのと断定せず、子供にとってプログラムはどの点がよく、どの点が悪いかと考えていきたい。
・ A幼稚園で、どんな点で子供を伸ばそうとしていたか。 1. 音楽的才能 2. 数観念
・ 遊戯室に於いてどんなことが見られたか。 1. 音楽的才能 2. 音と先生の手動きに於いて機敏に動く訓練をしていた。
・ 音に合わせて機敏に動くということは人生に於いて必要であると思うか。どんな意味で大切か。巧緻性、ということではできるが、A幼稚園での方法が最善であるか。交通道德を守るための機敏さを養うならば、生活のそうした課題を取り入れる。—ママ 遊びの中で習得された方がよい方法である。特に交通道德を守らない子供については命令的にすることもよい。
・ 宗教的信念を持って教育している
Lewis・すべて先生が命令的に教育されていることについて危険性がある。 子供の自発的活動が無視されている。 早教育についての考え方
・ 幼児に一つの事を深く学ぶと他の面で学ばれない事がある。
・ 子供達にとってどんな事が大切か選択せねばならない。
・ 音楽教育の早教育が大切であると言うと他の事がそれだけ無視される。
・ 例えばヴァイオリンを重視するとその子のpersonalityの他の部面が無視される。
・ 天才がどうして生まれるかはまだ科学的証明が出来ていない。
・ ママ
・ その子が何で成功しているところかげに、他の面で大きなロスをしていることを気づかない
・ 私達は公平に全貌を見払わねばならぬ。
音楽教育を与える時期について考えたい。
・ 小さい時から音楽的環境にしママたらせたいか。 訓練的なものは四・五才から発ママ
子供の音楽教育は幼稚園ではどうあるべきか 幼稚園に於ける音楽教育はどうしたら子供のcreativeをのばすことが出来るか どんな材料を与えたらよいか。どんな音楽が子供のcreativeな音楽であるか、考えてほしい。

話し合い（表6参照）は、その前までに参観したA幼稚園を中心にして、行われたと思われる。主に、A幼稚園で行われていた音楽教育が話題の中心であるが、この話し合いを通して、「どこの幼稚園はよい、悪いのと断定せず、子

供にとってプログラムはどの点がよく、どの点が悪いかと考えていきたい」「すべて先生が命令的に教育されていることについて危険性がある。子供の自発的活動が無視されている」「子供達にとってどんな事が大切か選択せねばならない」「私達は公平に全貌を見払わねばならぬ」「子供の音楽教育は幼稚園ではどうあるべきか…考えてほしい」というルイスの発言³⁶⁾に、幼稚園において求められる幼児教育へのルイスの思いが伝わって来る。そして、この話し合いは、今後続く幼稚園参観を見る参加者への視点を示唆するものであったと思われる。

② アメリカンスクール見学

ノートに「11月7日アメリカンスクール見学について」³⁷⁾とあり、訪問エチケットや考えてほしいことや見学グループ班について書かれている。そして、参観記には8時40分集合としか書かれていないため、実際に見学したのが11月7日なのか、見学についての説明日が11月7日なのか、定かではない。しかし、その頃に見学したことは確かだと言えよう。見学の時に書かれた内容は表7のとおりである。

表7 アメリカンスクール 参観記

山手線原宿駅に八時四十分集合
… アメリカンスクール
先づ図書館に案内される。校長miss Hamillは、円形にならべた椅子に座った我々の前のテーブルに腰かけて挨拶をされる。“日本ではテーブルに座ることはしないが、私は、かたくならずくつろいだ気持ちになるために気持ちになるためにテーブルに腰かけます”と言う。
日本人である私にはやはり、馴染めない。
幼稚園 収穫感謝祭についての学習
あるグループは切紙細工、あるグループは積木・ままごと、二・三人はイーグルで絵を描く、あるグループは黒板一杯に貼った薄茶の紙に絵を描いている。
設備 テーブル、四人が二人づゝむき合って座れる。
手洗い場 室のうしろの壁についている。湯と水と出る。蛇口が四つか五つある。手ふきは、タオル代用の紙が引き出せるようになっている。

アメリカンスクール参観記の設備の記録が書かれている講義ノートの同じ頁に、ルイスと周郷の言葉が書かれている。ルイスの言葉は、「星は手のとゝかぬ高い所にある。けれど人は星に導かれて生きる」³⁸⁾と記されている。周郷博の言葉は、「希望 ちょっとずつよくなるというように考える所にある。少しづゝよくなる社会を考えねばならぬ。少しでも着実にやれることをやっていく」³⁹⁾と記されている。ルイスと周郷のこの主張がIFEL 5 回生に投げかけられた言葉だとすれば、何を意味しているのかは疑問である。周郷博⁴⁰⁾が、『幼年教育NO2』において、紹介しているロバート・フロストの「星からの問い」という詩と関係

があるのかどうかは今後の課題である。さらにノートに、「アメリカに於ける小学校、1.アメリカの社会における教育、2.子供は成長し且学ぶ、3.教師、4.学校教育の実際、5.結論と将来の見通し」⁴¹⁾とタイトルと内容の箇条書きが記されていることから、ルイスが講義した様子がうかがわれる。4.学校教育の実際として、「学校最初の段階 ナーセリースクール的一天、幼稚園・小学校・中学校・上級学校における生活」と記されていることと、菊池の文章を合わせて考えると、「アメリカではだいたい三才から四才まで収容している施設をナーセリー（保育所）、五才を幼稚園といい、ナーセリーから小学校三年までを一同として、アーリー・チャイルドフッド・エデュケーション（すなわち訳して幼年教育）とよぶこと。また、幼稚園の先生は幼稚園だけにとどまることなく、保育所ないしは小学校低学年の先生に鳴りうる資格があること、実際に先生はこれらのなかを交流疎通している現状である」⁴²⁾ことを5回生はここで学んだのではないかと考えられる。

③ B幼稚園見学

いつ見学したのか、月日の記載はないが、記録に「11月単元」とあることから、11月に見学をしたと考えられる。見学の時に書かれた内容は表8のとおりである。

表8 B幼稚園 参観記

11月単元“生きものを可愛がる 二年保育 年少 汽車ごっこ 先生が洩れなく計畫されて、子供の発達段階よりもすゝみすぎた感じがした。 例えば、信号機等もつかい方は判らずあまり興味がないようだった。切符の売買は面白いようだったが、切符切りの役は浮いていた。もっと自由に活発に 汽車に乗ったり、走ったり、降りたり、遊びたいだろうとおもうのの一つの秩序にはめすぎた感じ。又、遊びを秩序にはめ乍ら、簡単に 当然出来るはずの順番をまつ。右側を歩く。踏切をわたる。押さずに乗る等の交通道德の基礎の学習がとり入れられていない。大体において喜んで思いきり遊べず、少し、興味がわいて来た頃に、片付けになってしまって惜しいとおもった。 二年保育 動物の製作 各グループ（粘土・紙細工・描き方・木工）にわかれて作業していたが、皆一所懸命しているが、目的や関連がはっきりしなかった。木工は、同じ形のうすい細い板が用意されていたら
--

B幼稚園を参観して、年少組の汽車ごっこが子どもの発達段階や興味とは関係なく展開されている様子や交通道德の基礎の学習が取り入れられていないことを、大橋は残念に思っている様子がうかがわれる。年長組の動物の製作についても目的や関連がはっきりしないことや、木工の環

境についても批判的に見ている様子がうかがわれる。

菊池が、「現に存在する幼年教育施設一幼稚園一のあり方は、はたして私たちに肯定できるあり方であろうか。このことについて、私たちは多くの疑問をぶちまけ十分討議をつくしたのであったが、これらの疑問はけっきょく、幼稚園本来のあり方でない幼稚園が現在少なからず存在し、これらを目のあたりに見ることによる不満に基因したものであることが明らかになった」⁴³⁾と述べているように、日本の幼稚園見学はその不十分さを目の当たりに見ることに留まったように思われる。

しかし、受講ノートに、「アメリカと日本の子供の立場に違いがないが、先生の態度に違いがある。生徒にどういうことを〇〇してなってマヤらねばならぬかという認識に違いがあるのではないかとおもう。ドアをあけて入った時 先生は心に目的を持っているが、その目的を外に現わす先生と現わさない先生とがある」⁴⁴⁾と記されていることから、アメリカと日本の幼稚園を比較することによって、日本の幼稚園に対する問題意識を明らかにしようとした様子がうかがわれる。

V. 大橋はIFELで何を学び、その後の幼稚園現場でどのように生かしたか

1. 大橋はIFELで何を学んだか

大橋は、10月24日付けでノートに次のように記している。「子供の研究と教育に生命を託す、ということは口で言うことはやさしい。そして、私も生きている限り、この与えられたむづかしいけれど他の生活を捨て、専念するということを考えてみる。生活する ということの内容は、どんな事だろう。趣味も、友達も、娯楽も、生活だろうか、もし生活ならば、それ等が、私の使命である。教育と一致しない時、私は苦しむ。私は仕事をする以上、仕事が私の趣味でありたい。なのに、私には そこまで打ちこめない。そこに 私の苦しみがある。…私は一年前に、いや一ヶ月前にこうして三ヶ月、東京で生活することを予想しただろうか。そして半年後さえも予想がつかない 恐ろしい事だ。…私は毎日毎日をひたすらに生きていく。いつか 私も落ち着いて、若さをなつかしむ時が来るだろう。私は、私の環境と私自身が私を導いていくのを 待っている。たとえ苦しくても」⁴⁵⁾。このことから、代表としてIFELに参加した任務の重さと幼児教育の重要性を再認識した30歳の大橋が、この幼児教育に自分のすべてをかけることができるだろうかと戸惑っている様子がうかがわれる。それほどに、ルイスの指導は、大橋の心を揺さぶり感銘を与えたものであったといえよう。そして、大橋自身が、人間的に幼く若い自分を認めて、自分の環境と自分自身がこの未熟な自分を導いてくれることを信じて、どんなに苦しくても、この幼児教育の道を歩いていこうと決心し

ている様子がうかがわれる。研修後、『幼年教育NO1』に、大橋は「幼児の観察からなにを学んだか」と題して、お茶の水女子大学附属幼稚園で観察したもの的一部とその後奈良女大附幼で観察した大橋と母親の観察したものの一部を載せている⁴⁶⁾。そして最後に、「…子どもを正しく観る、ということは、私たち保育者にとってもっとも大切なことだと思います。観察、調査としては、多角度から、広く、かつ深く、あらゆる調査、観察の方法を用いて、客観的に、しかも愛情をもっておこなわなくてはならないとおもいます。そして子どもたちの幸福のために、誤りのない指導、助言をあたえたいものです」⁴⁷⁾と述べている。このことから、大橋は、子どもを正しく観ることを研究の第一として、幼児教育実践をしなければいけないことを学んだと思われる。筆者は、奈良女大附幼に昭和49年から昭和51年まで在職し、大橋から「目の前にいる子どもの姿から子どもの興味関心を見取り、発達を見通して、保育者は子どもとともに幼児教育をつくっていく」ことを学んだ。大橋は、IFELでの学びを、子どもたちの実践に生かし、幼児教育界に浸透させたといえよう。

2. 大橋はIFELの学びを幼稚園現場でどのように生かしたか

戦後の奈良女大附幼は、幼児の生活経験に基づいて昭和24年度試案「保育計画」を作成し、その後月案を作成し、それらの幼児の生活経験を教育の視点から見直して、昭和29（1954）年に『幼稚園の教育計画』を作成している。その内容は、奈良女大附属小学校（以下、奈良女大附小）の「しごと」「けいこ」「なかよし」という教育構造（教育形態）をもつ教育計画「奈良プラン」に影響を受けて（見据えて）作成されたことがうかがわれる⁴⁸⁾。つまり、大橋はルイスから幼年教育（3歳から8歳まで）のことを学び、そのことを念頭におきながらこの『幼稚園の教育計画』に取り組んだと思われる。また、『幼稚園の教育計画』の内容に3年保育児の観察記録が掲載されている。観察記録を執筆しているのは今西寿子であるが、このことから、IFEL研修後、大橋は園内研修でIFELについて報告し、観察記録の重要性は園内で共通理解がなされていたと思われる。

奈良女大附幼在職中に、筆者が一番印象に残っているのは、「絵本の部屋」をつくるにあたって、大橋を中心に「幼児と絵本との出会い」について実践研究（昭和49年～昭和51年）をしたことである。奈良女大附幼では、昭和44年より、村田孝次園長（心理学）のもとで、「ことば遊び」の研究をはじめ、その成果をまとめて『幼児のことばあそび』⁴⁹⁾を発行している。続いて本田義憲園長（国文学）のもとで絵本の研究に着手し、昭和50年に再び村田孝次園長のもとで、幼児と絵本との出会いについて、子どもの実態及び子どもの観察に基づいて、環境構成・指導法を工夫して実践し、その成果をまとめて、昭和51年『絵本との出会い』と

⁵⁰⁾して発行している。『絵本との出会い』は、2014年、すぐれた実践研究として、日本図書センターから『戦後幼児教育・保育実践記録集第8巻』⁵¹⁾に復刻して出版されている。ここでもまた、大橋は、IFELでの学びを、幼児教育の実践及び実践研究に生かし、幼児教育界に浸透させたといえよう。

VI. おわりに

大橋は、「IFEL後、ルイス先生は2・3回、幼稚園に来て下さったのよ。一度はIFEL後、もう一度は園舎が奈良市東向北町から現在の奈良市学園北一丁目に移転後（昭和42年）。確かもう一度あったと思うが…」と話したことがあった。小川正通が、『60年の歩み』の挨拶において、「戦争中の国民保育から、戦後の自由保育、民主保育への転換も大変でした。来校したアメリカ教育使節団に保育の現場を見てもらったこと、…などもつい先頃のように思い出されます。」⁵²⁾と述べていることから、ルイスを含むアメリカ教育使節団は、研修後保育現場を視察したようである。そして、その後も長きに亘って、ルイスはIFEL参加者と交流しようとする思いがあり、大橋は心からルイスを尊敬していた様子がうかがわれる。

IFEL 6 回生の角尾稔（東京学芸大学）は、大橋が在職中、妻角尾和子（東京学芸大学附幼）とともに奈良女大附幼の公開保育研究会に毎年欠かさず参加した。大橋は年に一度角尾夫妻に会えることに感謝し、角尾夫妻との意見交換が楽しみだったと話した。角尾稔は、IFEL参加後、IFEL『幼年教育』の編集に加わり1952（昭和27）年2月『幼年教育』⁵³⁾（IFEL幼年教育研究会編）を創刊し、1954（昭和29）年から文部省・教材等調査委員会委員として幼稚園教育要領編纂に参加し、1956（昭和31）年幼稚園教育要領を作成した一人である⁵⁴⁾。筆者が日本保育学会第64回大会（2011年5月）において、「IFEL 5 回生大橋和子講義ノート～幼児の研究・観察を中心に～」と題して発表した際、会場に参加していた角尾稔は、「昭和31年の幼稚園教育要領は、6領域（≠教科）を定めて小学校教育との一貫性を図ろうとした。これはまさにルイス先生の幼年教育の考え方によるものである。しかし、それは失敗した。まさに今、またその時がきた。先の教訓を生かして幼小連携を考え、実践されることを願う」と感想を述べ、その5か月後に他界した。角尾弘は「葬儀ごあいさつ」（2011年10月）において、「…IFELまでは統計的な手法による教育の研究を主体としていましたが、ここでの体験から、個々の幼児の行動記録から幼児の発達を研究する手法や、個々の個性を生かした教育に研究方法が変わったと聞きます。…父は、その後（昭和44年）在外研究員として米国に派遣された際にも、ルイス先生をたずねるなど、その後も敬愛し、個人的に交流を続けておりました。…ルイス先生との交流が、人生で大き

なききっかけとなった事と思います」⁵⁵⁾と記している。角尾稔もまた、IFELのルイスの幼児教育に対する考え方に感銘を受け、実践しようとした人であった。

これらのことから、IFEL後もルイスと受講生は交流を深めながら幼児教育について考え、研究、実践していったと思われる。角尾稔はIFELで何を学び、その後の研究にどのように生かしたかについては、今後の課題にしたい。

本研究で明らかになったIFELで行われた研究の実際（観察）は、現在『指導計画の作成と保育の展開』⁵⁶⁾で紹介されている幼児の姿（実態）からねらいと内容を導き出して指導計画（長期・短期）を作成していく方法に生きていると痛感している。つまり、子どもを観察し、子どもの事実に基づいて保育を実践しなければならないことは、IFELを起点として今日の就学前教育・保育の現場に引き継がれてきたといえよう。

謝辞・付記

本研究にあたり、貴重な資料を提供していただきました故大橋和子先生、故角尾和子先生に謝意を表しますとともに、心よりお礼申し上げます。

本稿は、『児童教育学を創る』（児島書店、2011）に「資料 IFELの実際—大橋和子によるルイスの講義ノートを中心に—」として掲載したものを加筆修正したものである。

本研究は、日本学術振興会科学研究費（課題番号：20K02432）による成果の一部である。

文献

- 1) 国立教育研究所：日本近代教育百年史第6巻，1974.
- 2) 高橋寛人編：占領期教育指導者講習（IFEL）研究資料，すずさわ書店，2001.
- 3) 昭和二十五年度教育指導者講習會編：第六回教育指導者講習研究集録Ⅸ幼児教育，1950.
- 4) IFEL幼年教育研究会編：幼年教育，国民図書刊行会，1952.
- 5) 大岡紀理子：戦後教育改革期の「教育指導者講習会」についての一考察—東京地区開催の幼年教育を中心に—，地方教育史研究，6，49-70，2010.
- 6) 二方義・ヴァーナー・エー・カーレー（Verna A. Carley）：序文，昭和二十五年度教育指導者講習會編，前掲書.
- 7) 岡野博，功力嘉子：あとがき，昭和二十五年度教育指導者講習會編，前掲書.
- 8) 中島端子：教育指導者講習會（IFEL）第一次幼稚園教育終了，幼児の教育，50（2），フレーベル館，44，1951.
- 9) 前掲書，44-45.

- 10) 下牧英子：IFELの皆さまへ，IFEL幼年教育研究会編，幼年教育NO1，国民図書刊行会，100，1952.
- 11) ガートルード・エム・ルイス（Gertrude M. Lewis）：手紙，IFEL幼年教育研究会編，幼年教育NO1，前掲書，2.
- 12) 中島端子，前掲書，44-45.
- 13) 昭和二十五年度教育指導者講習會編，前掲書，260-262.
- 14) 二方義・ヴァーナー・エー・カーレー，前掲書.
- 15) 山崎奈々絵：教員養成における一般教養の位置づけ—IFEL研究収録の検討から—，PROCEEDINGS 08 Grant-In-Aid research Awards，お茶の水女子大学，14，2009.
- 16) ガートルード・エム・ルイス：序，昭和昭和二十五年度教育指導者講習會編，前掲書.
- 17) 同上.
- 18) 中島端子，前掲書，45.
- 19) ガートルード・エム・ルイス：序，前掲書.
- 20) 同上.
- 21) 同上.
- 22) 菊池ふじの：アイフェル六回生が到達した結論，IFEL幼年教育研究会編，幼年教育NO2，国民図書刊行会，17-25，1952.
- 23) 同上.
- 24) 同上.
- 25) 同上.
- 26) 大橋和子：IFEL幼児教育班第5回参加者大橋和子によるルイスの講義ノート，1-106，1950.
- 27) 昭和二十五年度教育指導者講習會編，前掲書，196.
- 28) 同前書，195 - 241.
- 29) 同前書，224 - 226.
- 30) 同前書，227 - 234.
- 31) 同前書，234.
- 32) 大橋和子，前掲書，74 - 90.
- 33) 大橋和子，前掲書，80.
- 34) 同上.
- 35) 大橋和子，前掲書，100 - 102.
- 36) 大橋和子，前掲書，100.
- 37) 大橋和子，前掲書，98.
- 38) 大橋和子，前掲書，82.
- 39) 同上.
- 40) 周郷博：幼年教育者への手紙，IFEL幼年教育研究会編，幼児教育NO2，前掲書，5，1952.
- 41) 大橋和子，前掲書，82.
- 42) 菊池ふじの，前掲書，18.
- 43) 菊池ふじの，前掲書，19.
- 44) 大橋和子，前掲書，86.
- 45) 大橋和子，前掲書，104-105.
- 46) 大橋和子：幼児の観察からなにを学んだか，IFEL幼年教育研究会編，幼年教育NO1，前掲書，59-62.

- 47) 同上.
- 48) 拙著：昭和20年代の奈良女子大学附属幼稚園の保育の
実際―試案「保育計画」、月案、「幼稚園の教育計画」を
中心に一，新見公立大学紀要，40，11-18，2019.
- 49) 奈良女子大学附属幼稚園幼年教育研究会編：幼児のこ
とばあそび，ひかりのくに（株），1973年
- 50) 奈良女子大学附属幼稚園幼年教育研究会編：絵本との
出会い，ひかりのくに（株），1976年
- 51) 奈良女子大学附属幼稚園幼年教育研究会編：復刻絵本
との出会い，福本真由美・浅井幸子，戦後幼児教育・保
育実践記録集，8，日本図書センター，2014.
- 52) 小川正通：挨拶，奈良女子大学文学部附属幼稚園，60
年の歩み，4，昭和46.
- 53) IFEL幼年教育研究会編，前掲書.
- 54) 角尾和子：ふたつの円 夫角尾稔をしのいで，2012年
11月.
- 55) 角尾弘：葬儀（告別式）ごあいさつ，2011年10月.
- 56) 文部省：指導計画の作成と保育の展開，フレーベル館，
2-41，1991.

**Practices of the Institute For Educational Leadership (IFEL) of the Kindergarten Education Group
after the war
～Focusing on lecture notes taken by Kazuko Oohashi～**

Norie TAKATSUKI

Faculty of Human Health Sciences, Niimi University, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

The fifth session of Institute For Educational Leadership (IFEL) of the Kindergarten Education Group (changed to the Early Childhood Education Group in the sixth session) was held during September and December in 1950 and the sixth session was held during January and March in 1951. Preschool education leaders from all over Japan gathered to each session. Lectures were given by Gertrude M. Lewis who was a consultant for the Elementary Education Bureau of the Education Ministry in the United States, and Hiroshi Sugo. The purpose of this study is to analyze the actual practice of IFEL, focusing on Gertrude M. Lewis's lecture notes taken by Kazuko Oohashi, one of the students in the fifth session. The result indicates that the students in the fifth session took the observation records actually at OCHANOMIZU Kindergarten and learned how to organize and summarize the studies on kindergarteners by taking records. Currently, it seems this method is handed down and adapted to daily practice at kindergartens.

Keywords: IFEL, Early Childhood Education, lecture notes taken by Kazuko Oohashi, observation records